

保育所保育士の受け持ち子ども数に関する調査研究

Reserch about the taking charge of child number of a nurse in the day nursery

鈴木 岩雄 *Iwao Suzuki*

(人間発達学部)

1. はじめに

保育所における保育士の配置基準は、「児童福祉施設最低基準」(昭和23年12月29日厚生省令第63号)に規定されており、入所する子どもの年齢と人員によってその保育所の保育士数が定まる。総数の定まった保育士は、子どもの年齢別等に編成されたクラス、組ごとに1名又は複数名配属され、そうして保育士は、受け持った子どもに対して日々保育活動を展開する。

保育所に入所している子どもは、一日の大半を、小学校に入学する時期まで、保育所という生活の場で、保育士と他の子どもたちとともに過ごすこととなる。子どもにとっては、保育士はその間、親に代わって自分を受け止め、遊びや楽しさ、喜びを与えてくれる大きな存在となる。

それゆえ、子どもにとって、保育士はどのようなときに、どのように、どれほど自分にかかわってくれるか、また自分と同じことを求める友だちはどれほどいるのかということが大きな関心事となるに違いない。世上、子どもは、「先生から頭を撫でてもらう回数が多い方がいい」とよく言われるとおり、子どもにとって保育士の配置基準は厚いに越したことはないだろう。

しかし、4歳、5歳になっても、保育士が1対1で世話をした方がよいかというと、決してそうではない。そのようなことは経営的に困難であり、保育料が高くなることを覚悟しなければならないことは言うまでもなく、保育活動では、子どもの年齢、発達につれて適当な人数の子ども集団、適当な規模のクラスが必要となってくる。では、保育士が保育活動をするうえで、適当な子ども人数とはどれほどなのだろうか。

また、子どもにとっての絶対的な庇護者である親と保育士との根本的な違いは、愛情の注ぎ方にあるといえる。親はわが子に愛情を注ぐ「偏愛」が一般的であり、周りもそうした行動に寛容なのに対して、保育士はすべての子どもに遍く愛情を注ぐ、「遍愛」、「博愛」でなければならない。保育士には、一人ひとりに満足のいく愛情を注ぐことと同時にすべての子どもに対して公平に愛情を注ぐことが求められる。

実際の保育活動においては、当然、このことは容易ではない。一日の保育活動は、対象とする子どもの年齢・発達段階は幅広く、配慮・対応すべき事項は、広範多岐、生命維持

的な事項から教育、指導的な事項まで多種多様である。その配慮・対応すべき事項は、「保育所保育指針」に示され、現在、それに基づく保育をしなければならなくなっている。

保育所では、子どもに対する「愛情」は、子どもが困ったり、してほしいと思ったりした時の「配慮・対応」として具体化されると言うことができる。では、何人かの子どもを受持ちながら、一人ひとりに配慮・対応しなければならない事項が数々ある中で、一体保育士は、どのように状況を判断し、配慮・対応すべきことを選択し、調整しているのだろうか。

保育士の活動には「臨機応変」ということが特に求められるとよく聞く。そのような保育活動が求められる事態が発生した場合、どのような配慮・対応しているのか、その実態を明らかにし、評価することができれば、とかく「成り行き」や「慣れ」に陥りがちな日常的業務を見つめ直す、すなわち自己点検、評価をするきっかけとなるのではないか。

2. 調査研究の目的

この研究は、保育士が「児童福祉施設最低基準」に位置づけられた「保育所保育指針」が示す「保育内容」を実施するに当たり、保育士が受け持つ子ども数と、保育所保育指針が求める保育活動との関連性を考察することによって、適切な保育活動をするための効率的な自己点検、評価に資することを目的とする。

3. 調査研究の方法・内容

保育士の受け持ち子ども数と保育活動の関係を明らかにするため、保育所に対してアンケート調査を行い、その結果を分析する。

(1) 調査目的

このアンケート調査は、保育所における、保育士が受け持っている年齢と子ども数、受け持ち子ども数に対する意識、受け持ち子ども数の変化やアクシデントが生じた際に対する保育行動等についての実態を明らかにすることによって、保育士の受け持ち子ども数と保育活動との関係を考察する基礎資料を得ることを目的とする。

(2) 調査対象

調査対象は、愛知県市津島市及び高浜市における全認可保育所（認定こども園の保育所機能含む。）（公立 6 園、民間 11 園、合計 17 園）で、クラス（組、グループ）を受け持っている保育士（正規職員、臨時職員を問わず。）を対象とする。

(3) 調査内容

アンケート調査の内容は、まず、次の事項を調査項目とした。

- ①保育士の勤務年数（通算年数）
- ②雇用形態

- ③受け持っている子どもの年齢
- ④現在のクラスの受け持ち年数
- ⑤現在のクラスの受け持ち保育士数
- ⑥保育士の役割（主、副等）
- ⑦受け持ちの子ども数
- ⑧保育活動ごとの受け持ちの子ども数に対する意識
- ⑨1日における設定保育の回数と時間
- ⑩設定保育時（年度当初）の保育可能の子ども数
- ⑪設定保育時（安定した時期）の保育可能の子ども数
- ⑫新たに入ってきた子どもへの配慮・対応事項
- ⑬子どもが多すぎると感じる際に不十分となる保育活動
- ⑭1対1で対応しなければならなくなった際のその子への対応
- ⑮1対1で対応しなければならなくなった際の他の子への対応
- ⑯子ども数が相当数減った際に可能となる保育活動
- ⑰時間的に余裕があった場合に可能となる配慮・対応事項
- ⑱自由遊びの際の配慮・対応事項

次に、保育活動における配慮・対応事項は、「保育所保育指針」の「保育の内容」で示された事項を参考に、26項目設定した。（別紙「質問紙」のとおり。）

(4) 調査方法

別紙の質問紙を用いた。

各園長に趣旨、調査内容、方法を説明した上で、園長を通してクラスを受け持っている各保育士に質問紙を配布してもらい、回答は回答者が回収用封筒に封入して、園に備えた回収用封筒に入れ、園で一括して調査者に郵送する形とした。

配布は、平成21年8月から10月にかけて行い、返送は概ね1か月以内とした。

4. 調査の結果・考察

(1) 調査結果

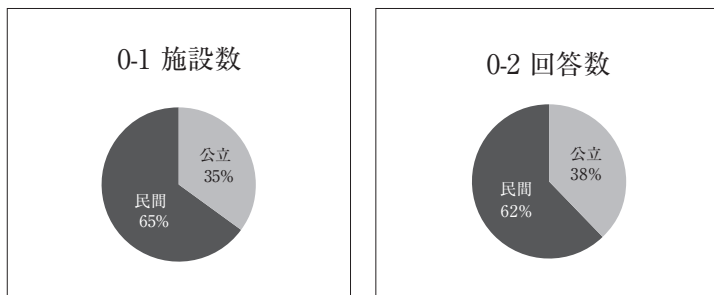
調査依頼をした17園（公立園は6園、民間園は11園）の保育所から125人（公立園は48人、民間園は77人）の調査票が回収された。依頼した園からは全園回答があり、クラス担当の保育士からはほぼ全員の回答を得た。これについては、とりまとめ用の「総括表」で確認した。

1) 基本的属性

①公立・民間の別

今回の調査では、施設数の割合は、公立園が35.3%、民間園が64.7%で、保育士の回答数は、

公立園が 38.4%、民間園が 61.6% であった。

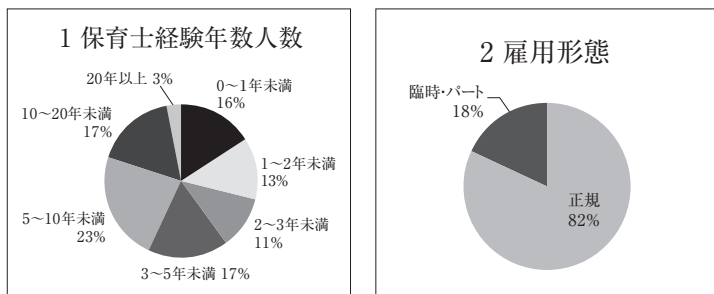


①保育士経験年数

回答のあった保育士の保育士経験年数（通算）では、0～1年未満が16%、1～2年未満が13%、2～3年未満が12%、3～5年未満が17%、5～10年未満が22%、10～20年未満が17%、20年以上が3%であった。

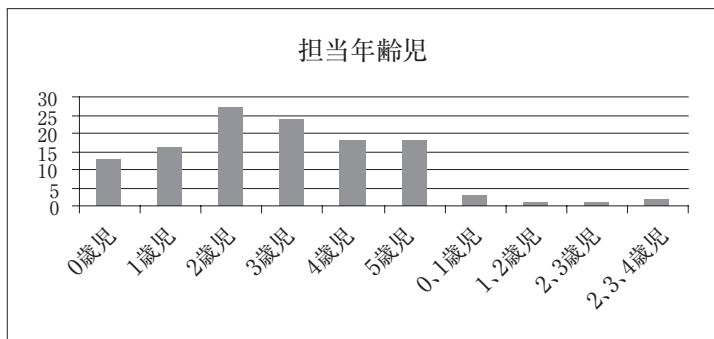
②正規職員・非正規職員の別

雇用形態をみると、正規職員が81.8%、パート、臨時等非正規職員が18.2%であった。



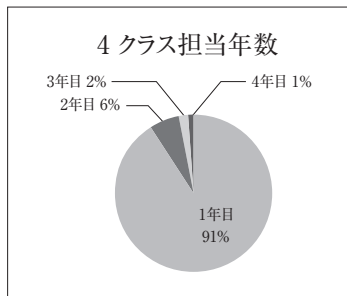
③受け持っている子どもの年齢

回答者が受け持っている子どもの年齢は、各年齢に大きな偏りはなかった。



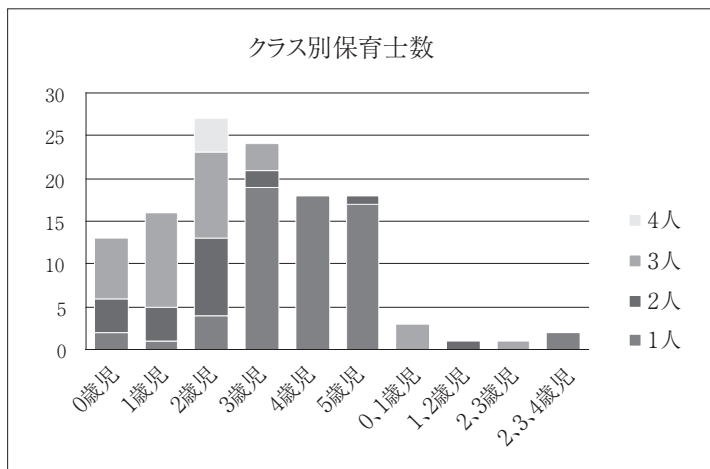
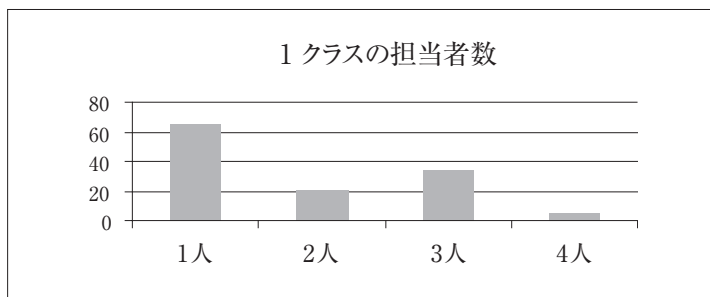
④現在のクラスの受け持ち年数

現在受け持っているクラスの担当年数は、殆どが1年目であった。なお、同じ子どもを2、3年と続けて担当する、いわゆる「持ち上がり」の場合は、クラスの名称が変わるので、1年目としている。



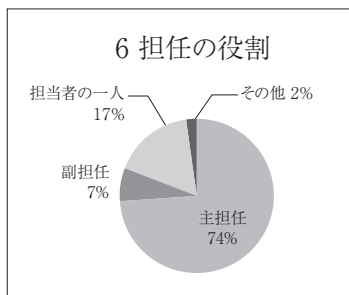
⑤現在のクラスの受け持ち保育士数

全体として、1クラスを1人の保育士が受け持っているのが52.0%で、最も多かった。回答者の受け持ちクラスは、年齢別のクラスが94.3%、混合保育(異年齢児)のクラスが5.7%で、これを年齢別クラスで見ると、3歳以上児は90.0%が保育士1人、うち4、5歳児は97.0%が保育士1人、3歳未満児は87.5%が2人以上で受持っている、3人体制が50.0%だった。



⑥保育士の主担任、副担任等の別

回答者の多くは 1 つのクラスを 1 人で受け持っており、74.2% が主担任だった。

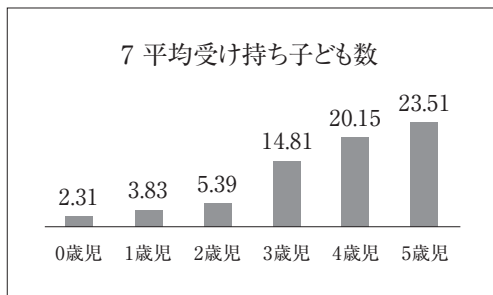


2) 受け持ち子ども数の実態

①平均受け持ち子ども数

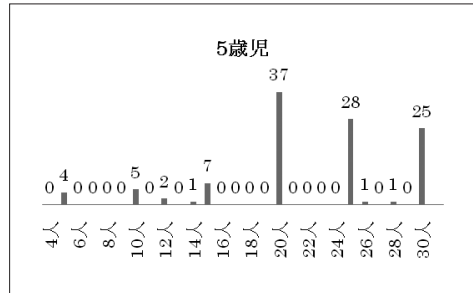
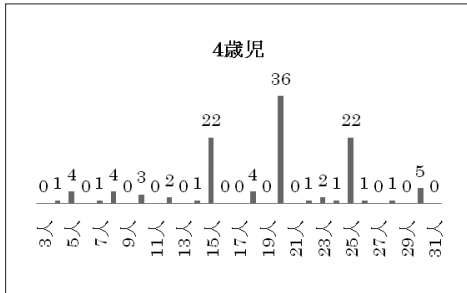
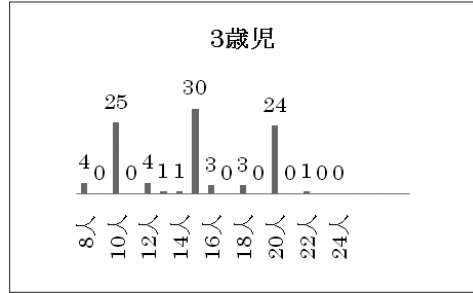
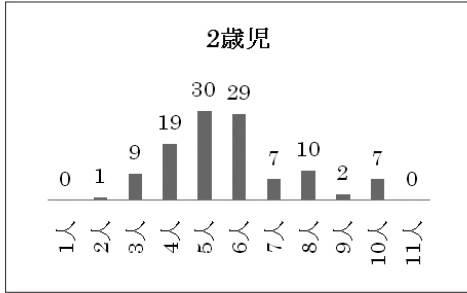
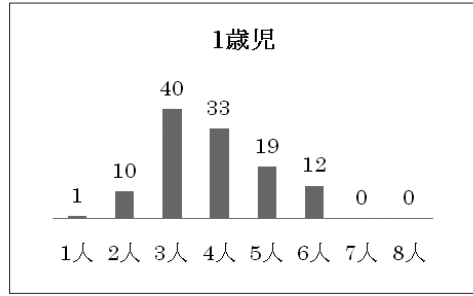
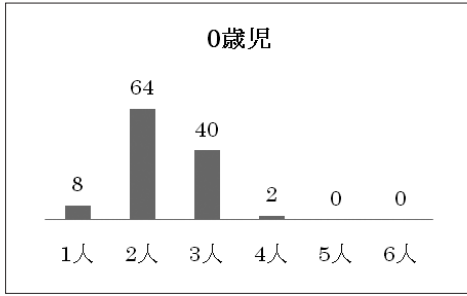
受け持ちの子ども数（複数担当制の場合は、責任を持って保育、記録することになっている子ども数を記入してもらった。）の平均は、0 歳児は 2.3 人、1 歳児は 3.8 人、2 歳児は 5.4 人、3 歳児は 14.8 人、4 歳児は 20.2 人、5 歳児は 23.5 人だった。

児童福祉施設最低基準により、保育士の数は、「乳児おおむね三人につき一人以上、満一歳以上満三歳に満たない幼児おおむね六人につき一人以上、満三歳以上満四歳に満たない幼児おおむね二十人につき一人以上、満四歳以上の幼児おおむね三十人につき一人以上」と定められているが、いずれも基準を上回る保育士が配置されていた。

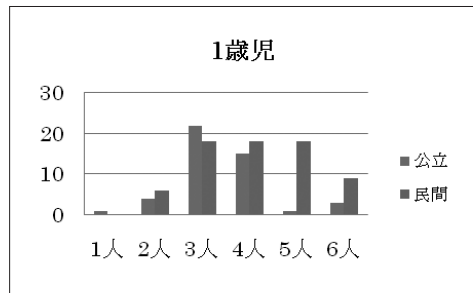
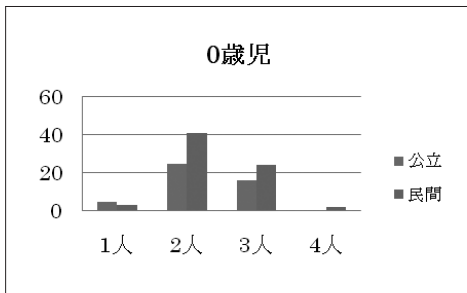


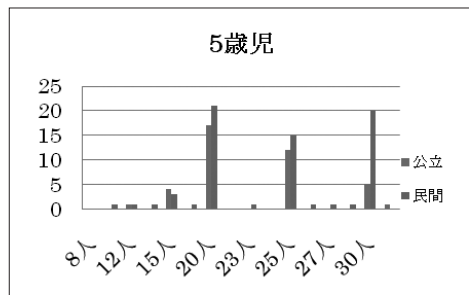
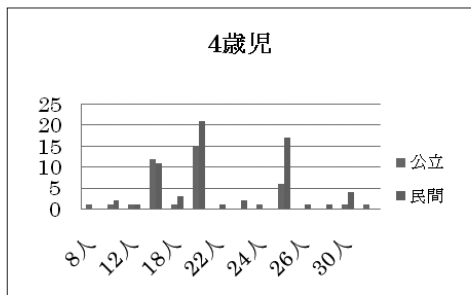
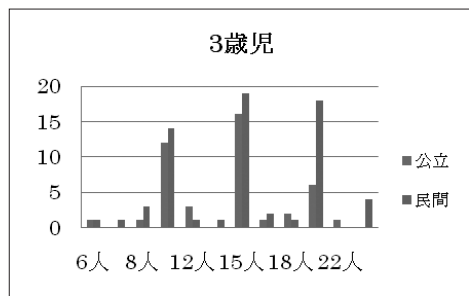
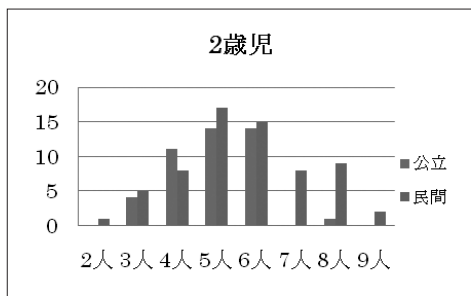
②実際の受け持ち子ども数

次に、実際の受け持ち人数をみると、0 歳児については、保育士 1 人当たり子ども数は、2 人が 56.1%、3 人が 35.1% を占め、1 歳児については、3 人が 34.8%、4 人が 28.7%、2 歳児については、5 人が 26.3%、6 人が 25.4%、3 歳児については、15 人が 28.6%、10 人が 23.8%、20 人が 22.9%、4 歳児については、20 人が 32.4%、25 人と 30 人が 19.8%、5 歳児については、20 人が 33.3%、25 人が 25.3%、30 人が 22.5% を占めていた。各保育所においては、最低基準をほとんど上回る保育士が配置されていることがわかる。



この保育士配置人員を公立・民間別にみると、いずれの年齢児においても公立園の方が民間園より人数のピークが小さい方に位置していた。すなわち公立園は民間園より保育士が厚く配置されている実態にあることを示している。





(2) 調査結果と考察

1) 保育活動ごとの受け持ちの子ども数に対する意識

保育活動を①登園時における親対応、②登園時における子ども対応、③健康等の点検、④自由遊び、⑤保育室における設定保育、⑥園庭における設定保育、⑦着脱衣、⑧手洗い、⑨食事、⑩おやつ、⑪排泄、⑫昼寝、⑬降園時における子ども対応、⑭降園時における親対応、⑮連絡帳等記録、⑯引き継ぎに分け、保育活動別に現在の受け持ち子ども数について、a 多いと感じているか、b 適当と感じているか、又は c もう少し多くてもいいと感じているか質問したところ、次のような回答結果を得た。

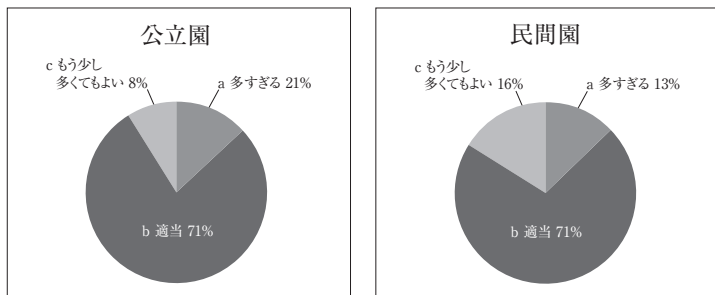
まず、全体として保育活動の 80%～90% について、現在の子ども数が「適当」と答えていた。次に、子ども数が「多すぎる」と感じる保育活動は、⑨食事が 22.3%、⑤保育室での設定保育が 16.5%、⑦着脱衣、⑧手洗い、⑪排泄の 3 項目が 16.4% だった。短時間、集中的に個別的対応が求められる活動については、保育士の手が足りないと感じていた。

また、⑮連絡帳記録のように直接子どもに関わらない事項についても、時間的余裕がないためか、13% が「子どもが多すぎる」としていた。送迎時の親子への対応では、登園時の方が降園時より短時間、集中的に接触し、親からの連絡等も多いためか、子ども数が多すぎると感じている。⑯引き継ぎは、延長保育への移行の際、担当保育士間で行われるが、特定の子どものための要点的説明が中心で、多すぎると感じているのは 9% だった。

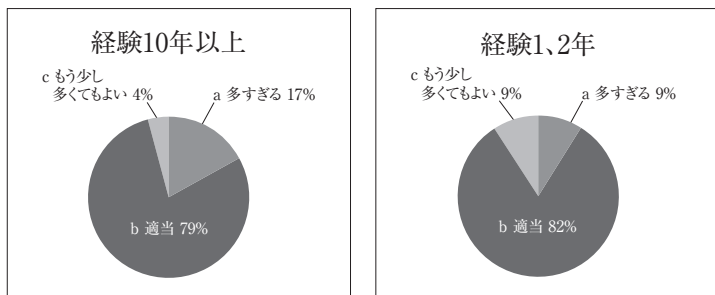
一方、「もう少し多くてもよい」と答えたものは、④自由遊びが 12.3%、⑥園庭における設定保育が 10.7% だった。



次に、保育室での設定保育に関して、公立・民間別にみると、公立園は、現在の子ども数は「多すぎる」と答えているのが 20.8% あったのに対して、民間園は 13.3% だった。また、「もう少し多くてもよい」と答えているのが、民間園には 15.6% あったのに対して、公立園は 8.3% だった。公立園では、民間園より保育士が若干厚く配置されている実態にあるが、各保育活動場面ごとに聞いてみると、民間園は、公立園と比べ人員配置は若干薄い傾向にあるが、現状を否定的に捉えず、子どもが多少増えてもよいと肯定的に捉える傾向を見ることができた。



これを、経験年数別にみると、経験年数 10 年目以上の保育士は、現在の子ども数を「多すぎる」と答えたのが 16.7% あったのに対して、経験年数が 1、2 年目の保育士は 8.8% だった。また、「もう少し多くてもよい」と答えたのが、経験年数が 1、2 年目の保育士は 8.8% だったのに対して、経験年数 10 年目以上の保育士は 4.2% であった。



次に、「もう少し多くてもよい」と答えたもので最も多かったのが、(水)自由遊びの 12.3% であったが、これを公立・民間別にみると、民間園が 16.9% に対して、公立園は 4.2% だった。経験年数別にみると、経験年数が 1、2 年目の保育士は 17.6% だったのに対して、経験年数 10 年目以上の保育士は、0% であった。

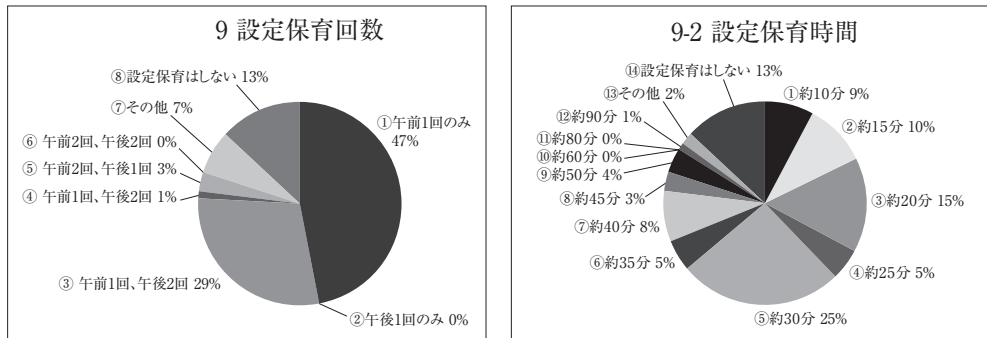
このように、民間園では、園の実情や経営面に配慮しているのか、子どもをより多く見ることに肯定的な傾向がみられた。また、経験年数別に見ると、ベテランの保育士は、子どもの健康・安全を第一に考えるのか、あるいは経験、体力・行動力についての自意識によるのか明確にはできないが、子どもをより多く見ることに否定的な傾向が見られた。

2) 保育室における設定保育の際の子どもの人数についての意識

設定保育は、保育者が一定の指導目標をもって子どもの活動を計画し、設定して行う保育の方法である。広範囲にわたる保育活動の中で、保育士が最も意図的、計画的、能動的に働き掛ける場面である。

①設定保育の状況

一日における設定保育は、午前1回あるいは午前1回・午後1回が一般的であり、その時間は20分ないし30分が多かった。



②保育室での設定保育……保育が可能な子ども数とその理由（年度当初等）

保育室での設定保育で、まず、年度当初の段階では、何人の子どもを保育ができるか、及びその理由は何かを、各歳児別に聞いたところ、次のような回答を得た。

0歳児は、最低基準上、子ども3人に保育士1人配置とされている。今回の調査では2人が23.1%、3人が61.5%という実態だった。これについて保育可能な人数として挙げたのは、2人が56.1%、3人が35.1%であった。その理由として、多いものから「子どもの安全、安心感に気配りできる人数」とするのが62.1%、「一目で全体の動きを掌握できる人数」とするのが25.9%挙げられた。

1、2歳児は、最低基準上、子ども6人に保育士1人とされている。今回の調査では1歳児に関しては、4人が43.8%、5人が27.5%、3人が18.8%という実態だった。これについて保育可能とする人数は3人が34.8%、4人が28.4%、5人が16.5%だった。2歳児に関しては、6人が47.8%、5人が21.7%という実態だった。これについて保育可能な人数は、5人が26.3%、6人が25.4%だった。その理由として、平均すると多いものから「子どもの安全、安心感に気配りできる人数」とするのが61.5%、「一目で全体の動きを掌握できる人数」とするのが39.6%挙げられた。

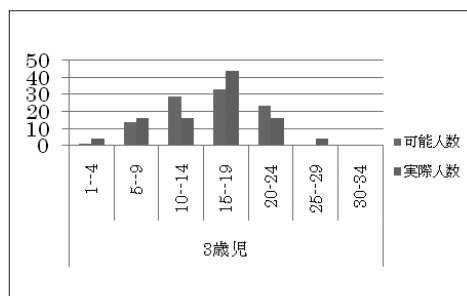
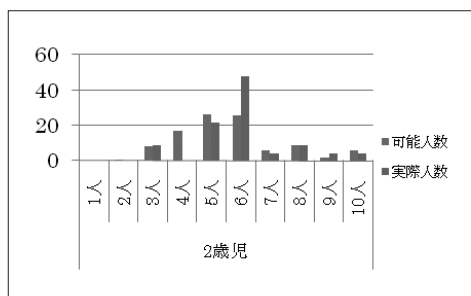
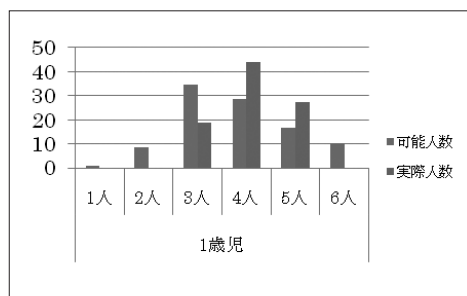
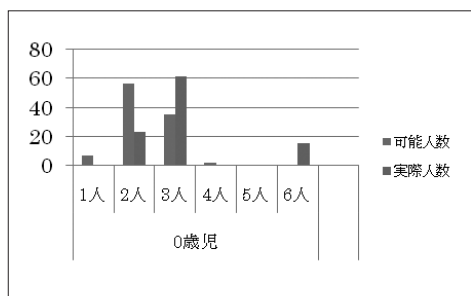
3歳児は、最低基準上、子ども20人に保育士1人とされている。今回の調査では3歳以上児については、人数にばらつきが大きいため5歳幅でまとめた人数で示すと、3歳児に関しては15人～19人が44.0%、10人～14人が16.0%、20人～14人が16.0%という実態だった。これについて保育可能とする人数は15人～19人が33.3%、10人～14人

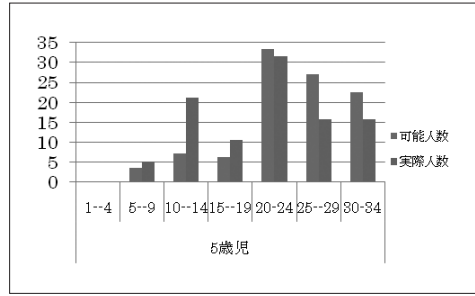
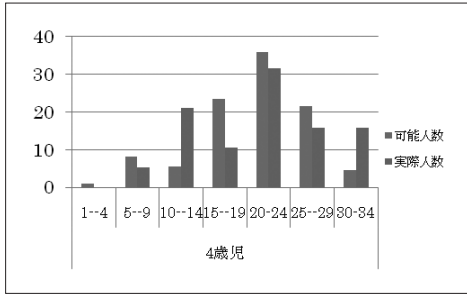
が 28.7%、20 人～14 人が 23.1% だった。その理由として、多いものから「子どもの安全、安心感に気配りできる人数」とするのが 46.7%、「保育士の言葉かけで子どもが顔を向ける人数」とするのが 36.2% 挙げられた。

4、5 歳児は、最低基準上、子ども 30 人に保育士 1 人とされている。4 歳児に関しては、20 人～24 人が 31.6%、10 人～14 人が 21.1%、25 人～29 人が 15.8% という実態だった。これについて保育可能とする人数は 20 人～24 人が 36.0%、15 人～19 人が 23.4%、25 人～29 人が 21.6% だった。5 歳児に関しては、20 人～24 人が 31.6%、25 人～29 人が 15.8%、30 人～34 人が 15.8% という実態だった。これについて保育可能とする人数は 20 人～24 人が 33.3%、25 人～29 人が 27.0%、30 人～34 人が 22.5% だった。その理由として、4 歳児は、多いものから「子どもの安全、安心感に気配りできる人数」とするのが 42.9%、「保育士の言葉かけで子どもが顔を向ける人数」とするのが 43.8% 挙げられた。5 歳児は、多いものから「子ども同士でまとまることのできる人数」とする 44.8%、「子どもの安全、安心感に気配りできる人数」と、「保育士の言葉かけで子どもが顔を向ける人数」とするのが 40.0% 挙げられた。

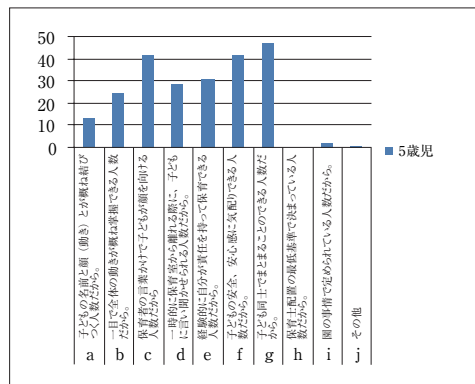
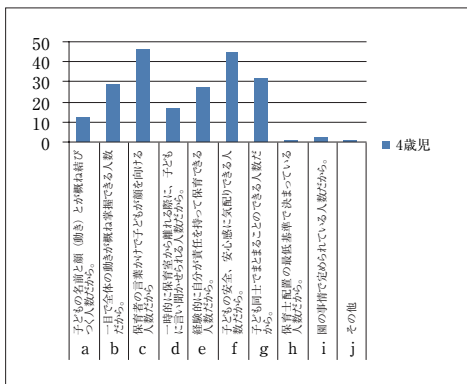
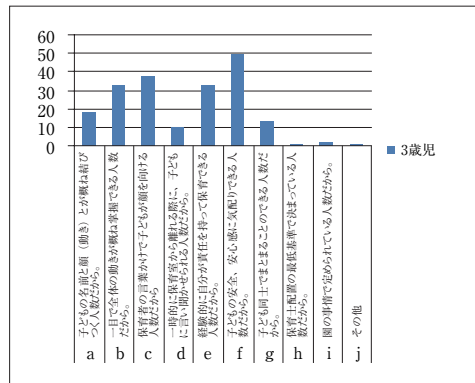
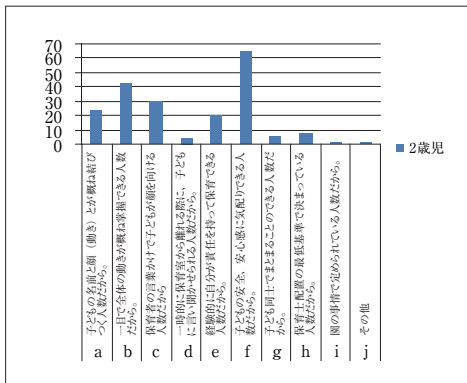
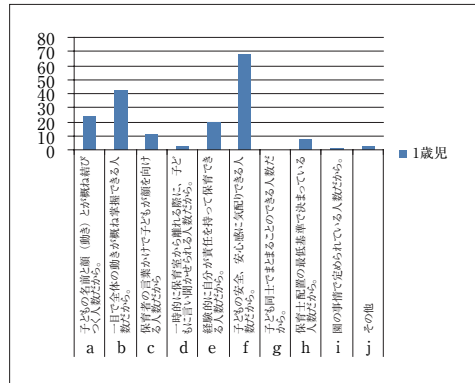
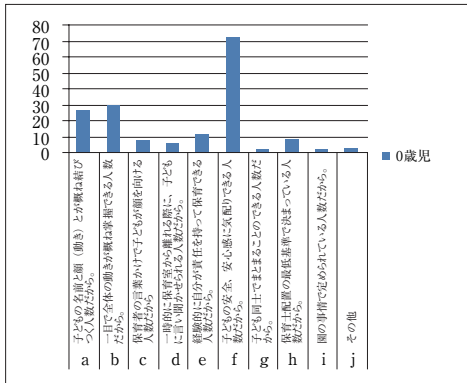
保育可能とする人数として挙げた理由で最も多かったのは、年齢が低いほど、「子どもの安全、安心感に気配りができる」という理由だった。次いで多かったのは、3 歳未満児は、「一目で全体の動きが概ね掌握できる」の理由だった。3 歳以上児の場合は、「保育者の言葉かけで子どもが顔を向ける」の理由が多く、4 歳児、5 歳児の場合は「子ども同士でまとまることのできる」という理由も多くなった。すなわち、子ども集団をうまく活用することで、保育士の手を補っている。

(歳児別の保育可能人数)





(歳児別の保育可能とする理由)



3) 保育室での設定保育で増やせる子ども数とその理由 (安定時期)

次に、子どもの動きが「まとまり、安定してきた段階」では、さらに何人の子どもの増やすことができるか、及びその理由は何かを質問したところ、次のような回答を得た。

0 歳児の場合は、0 人 (現在の人数が上限で増やせない) が 54.5%、1 人まで増やせるが 30.6%、2 人まで増やせるが 12.6% あった。基準の 3 人が保育可と答えた保育士は、68.2% がそれを限界とし、あと 1、2 人まで可とした保育士は、24.0% だった。

1 歳児の場合は、0 人 (現在の人数が上限で増やせない) が 49.6%、2 人まで増やせるが 20.4%、1 人まで増やせるが 19.5% あった。基準の 6 人が保育可と答えた保育士は、58.3% がそれで限界とし、あと 2、3 人まで可とした保育士は、41.7% だった。

2 歳児の場合は、0 人 (現在の人数が上限で増やせない) が 42.5%、1 人まで増やせるが 12.4%、2 人まで増やせるが 11.5% あった。基準の 6 人が保育可と答えた保育士は、87.5% がそれを限界とし、あと 2、3 人まで可とした保育士は、8.0% だった。

3 歳未満児では、1、2 人増やせる理由としては、「子どもが安定している」、「何とか保育できそう」が挙げられていた。

3 歳児の場合は、0 人 (現在の人数が上限で増やせない) が 33.6%、3 人まで増やせるが 18.7%、5 人まで増やせるが 23.4% あった。基準の 20 が保育可と答えた保育士は、43.4% がそれを限界とし、あと 5 人まで可とした保育士は、26.1% だった。

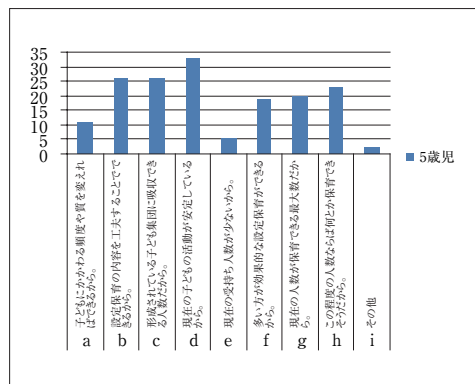
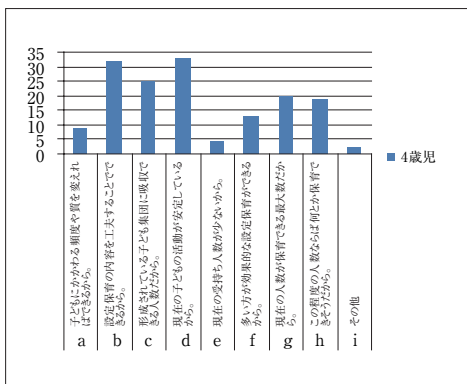
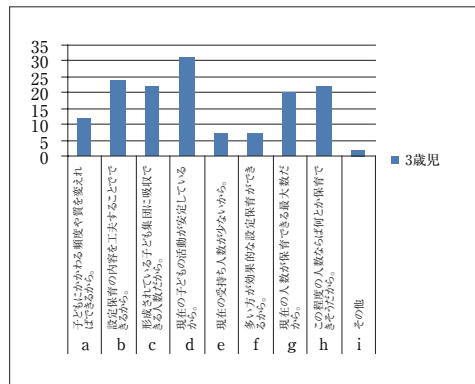
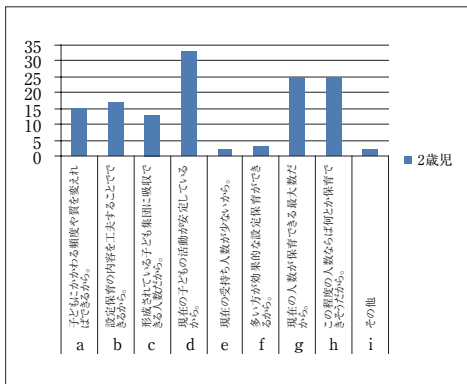
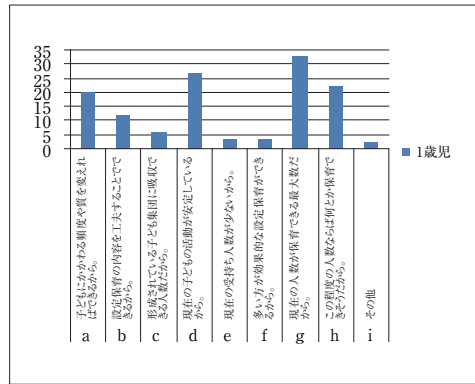
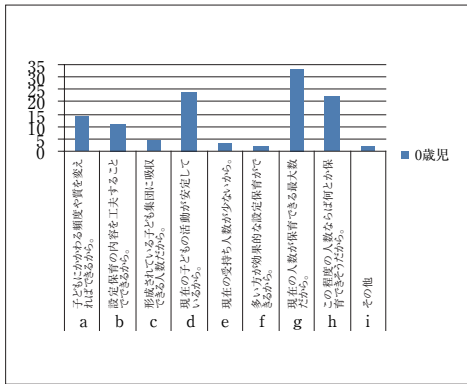
4 歳児の場合は、0 人 (現在の人数が上限で増やせない) が 33.3%、3 人まで増やせるが 12.0%、5 人まで増やせるが 32.4% あった。基準 30 人が保育可と答えた保育士は、60.0% がそれを限界とし、あと 5 人まで可とした保育士は、26.1% だった。また 25 人と答えた保育士は、31.8% がそれを限界とし、5 人まで可としたのは 45.0% だった。

5 歳児の場合は、0 人 (現在の人数が上限で増やせない) が 31.2%、2 人まで増やせるが 11.0%、5 人まで増やせるが 32.1% あった。基準の 30 人が保育可と答えた保育士は、50.0% がそれが限界とし、あと 5 人まで可とした保育士は、36.4% だった。また、25 人と答えた保育士は、36.0% がそれを限界とし、5 人まで可としたのは 32.0% だった。

3 歳以上児は、2 ないし 5 人増やせる理由としては、「子どもが安定している」、「設定保育の内容を工夫すればできる」、「子ども集団に吸収できる」が挙げられていた。

回答結果からすると、年齢が高くなるにつれて、現在の人数が上限で増やせないとする保育士が減少し、子ども集団の発達や保育内容の工夫などにより弾力的な対応ができると答える保育士が増加する傾向がみられた。

これを歳児別に分けると、回答数が少なくなるので、参考的な傾向に留まるが、最低基準が示す数値は、3 歳未満児では、これが上限とするものが 70 から 90% 近くあり、3 歳児では 20 人が上限とする保育士が 40% 程度で、さらに 4、5 人を増やしても保育ができるとするものが 30% 近くあった。4、5 歳児では、50% 程度が基準の 30 人を上限としているが、さらに 5 人は増やせるとしたものが 30% 程度あった。



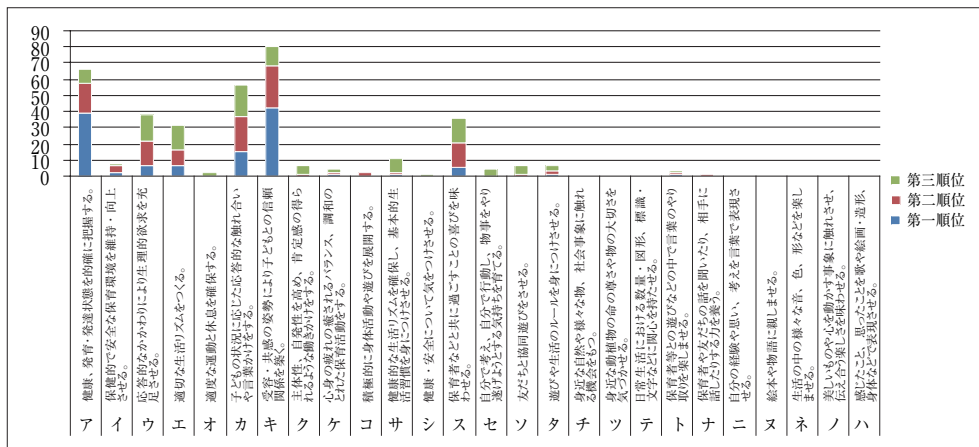
4) 子ども数の変化に対する保育士の配慮・対応方法

今回の調査で、子どもの人数の増減により、あるいは突発事項が生じた際、保育士はどのようなことに配慮し、どのように対応するのかを、「保育所保育指針」の「保育内容」に示されている事項と関連させて質問したところ、次の結果を得た。

①年度途中で新たに1人が入ってきた際……その子への対応

年度途中で新たに1人が入ってきた際、その子に対しては、まず、「受容・共感の姿勢で子どもとの信頼関係を樹立する」(34.7%) ことに努め、「健康、発育・発達状態を的確

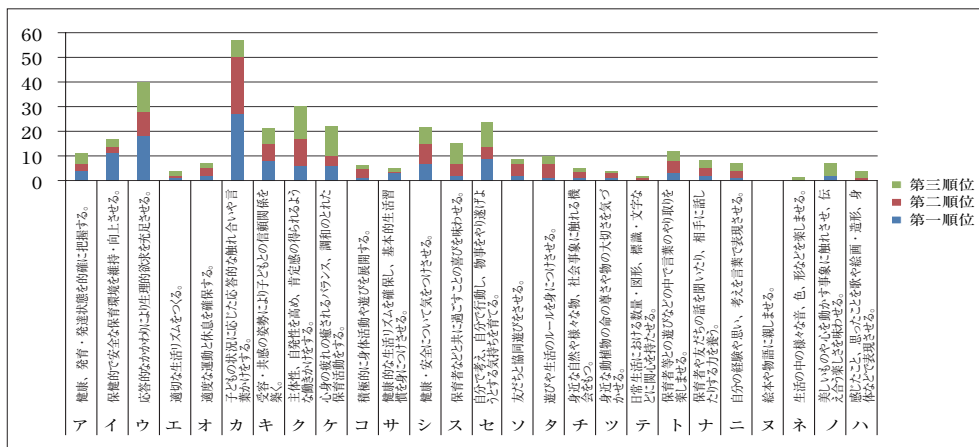
に把握する」(32.2%) ことを第一とし、「子どもの状況に応じた応答的な触れ合いや言葉かけをする」(15.5%)、「応答的なかわりにより生理的欲求を充足させる」(10.5%) など受容的対応に努め、「保育者などと共に過ごすことの喜びを味わせる」(9.9%) という対応をすると答えていた。



②保育室での設定保育……子ども数が多すぎると感じる時に不足する配慮・対応

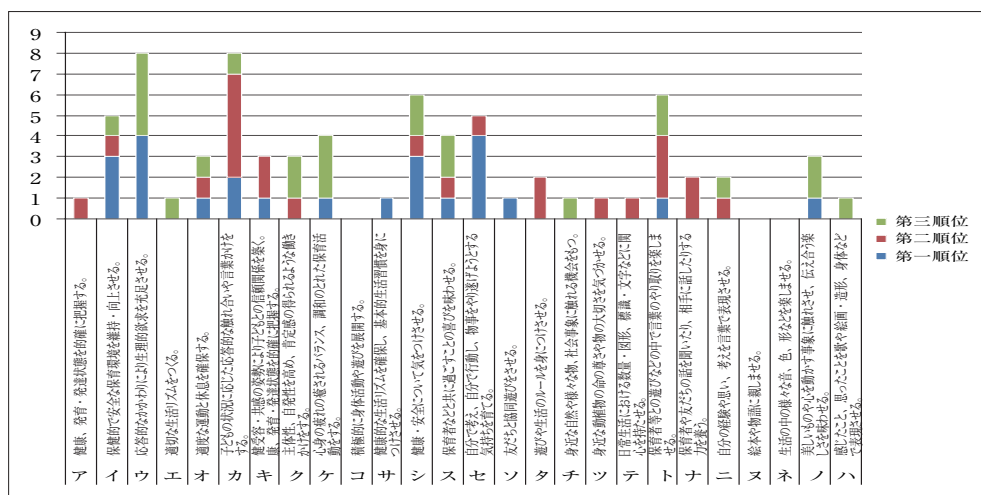
保育室での設定保育の際、子ども数が多すぎると感じているとき、どのような配慮・対応が不足するかを聞いた。

まずは「子どもの状況に応じた応答的な触れ合いや言葉かけ」(22.9%) が最も多く、次いで「応答的なかわりにより生理的欲求を充足させる」(15.3%) が多かった。保育士にとってこの応答的なかわりが最も大切にしている姿勢、態度として考えることができる。



3歳児については、配置基準上、1人の保育士が受け持つ子ども数が2歳児と比べると相当数増える。すなわち、2歳児の6人に対して、3歳児は急に20人となる。そこで、3歳児について、子ども数が多すぎると感じるときに、どのような配慮・対応が不足するか

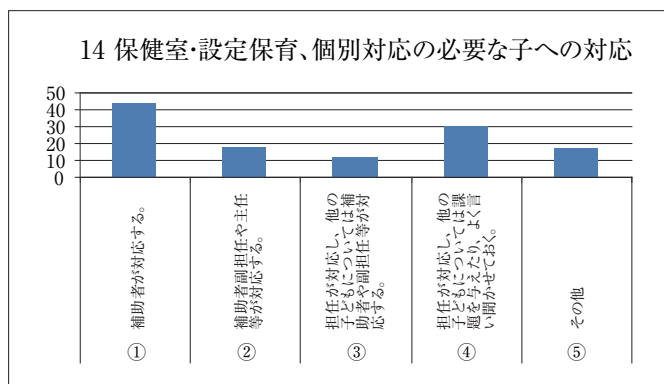
を聞いたところ、まずは「応答的なかかわりにより生理的欲求を充足させる」(16.7%)、「自分で考え、自分で行動し、物事をやり遂げようとする気持ちを育てる」(16.7%)、「健康・安全について気をつけさせる」(12.5%)の事項が挙げられ、その他、「保育者等との遊びなどの中で言葉のやり取りを楽しませる」(8.3%)も多かった。この年齢は、自立や集団遊びが課題となってくるため、このような対応・配慮に努めていることが数字にも表れていた。



③保育室での設定保育……個別対応の必要な子への対応

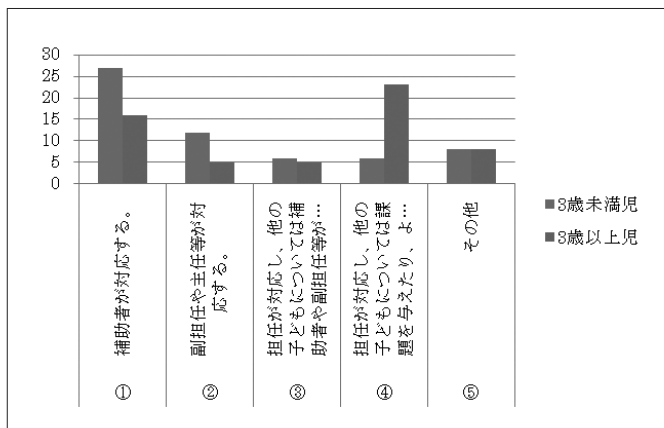
保育室での設定保育の際、排泄や保育室からの飛び出しなど、その子に個別にかかわる必要が生じたとき、その子に対してどのような対応、配慮をするのか聞いた。

全体として、「補助者が対応する」(37.1%)というのが最も多く、次いで「担任が対応し、他の子どもについては、課題を与えておいたり、よく言い聞かせておく」(25.6%)が多かった。



これを歳児別にみると、3歳未満児については「補助者が対応する」(45.8%)が最も多く、3歳以上児については、1人担任がほとんどであり、「担任が担当し、他の子どもについて

は課題等を与えてたり、よく言い聞かせておく」(40.4%)が最も多かった。

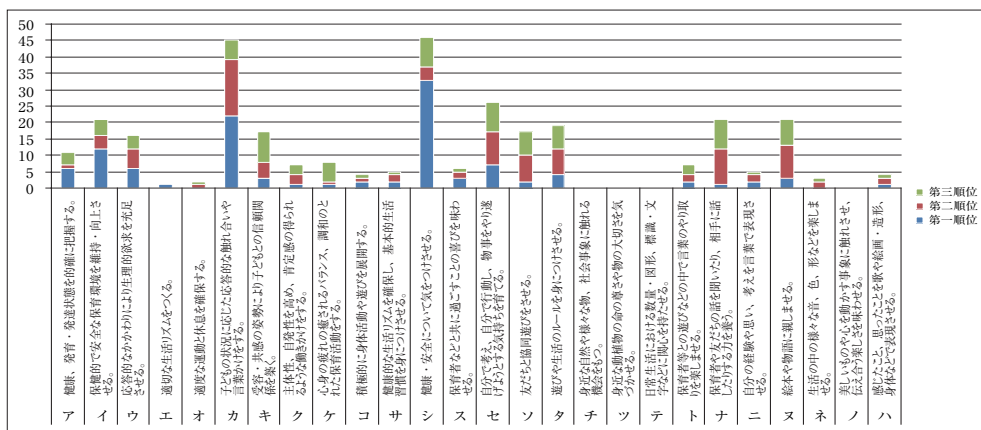


④保育室での設定保育……1人の子どもにかかり切りになるとき、他の子どもへの配慮・対応

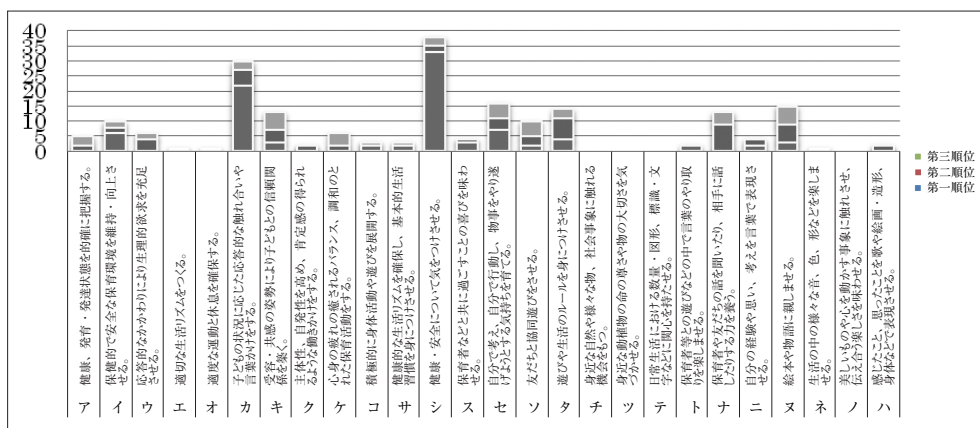
保育室での設定保育中に、クラスの1人に、おもらし、急な発熱、保育室からの飛び出しなどアクシデントが生じ、担任がその子にかかり切りになったとき、他の子どもたちにはどのような対応をするのか聞いた。

まず、「健康・安全について気をつけさせ」(28.9%)、「子どもの状況に応じた応答的な触れ合いや言葉かけ」(19.3%)をする。その上で、絵本に親しませる、この機会に自主的な行動をさせる、保育者や友だちの話を聞いたり、相手に話したりする力を養うことに心がけるとしていた。

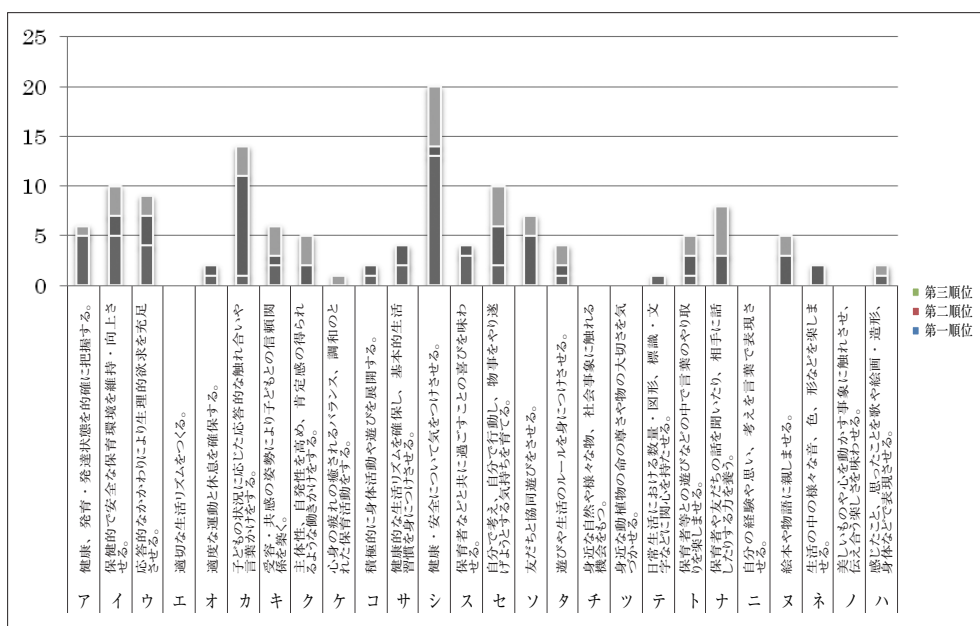
これを3歳以上児のクラスと3歳未満児のクラスとで比較すると、大きな差異がみられないが、3歳未満児については、健康・安全など養護面への配慮が若干高い傾向があった。保育士の経験年数で比べてみたが、ほとんど差異はなかった。



(3歳以上児)



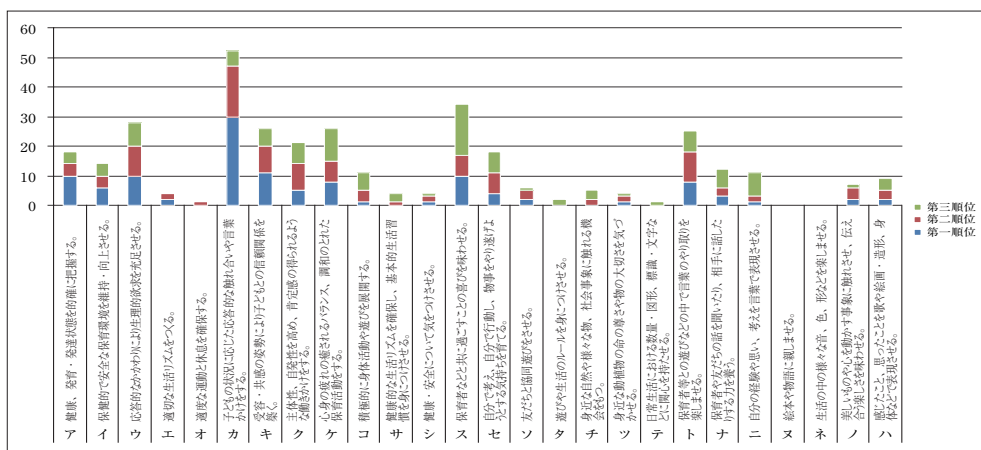
(3歳未満児)



⑤保育室での設定保育……子ども数が減少したとき、増やせる配慮・対応

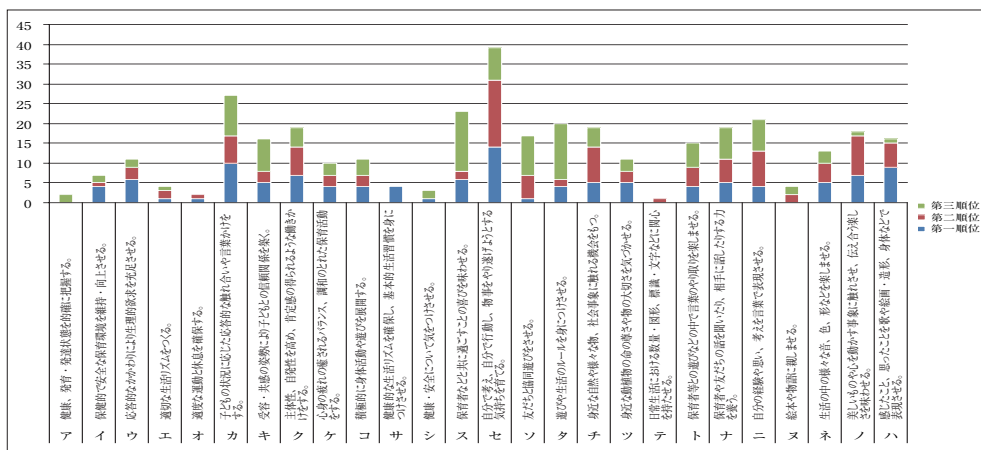
保育室での設定保育の際、子ども数が欠席などで相当数減少したときは、どのような配慮・対応ができるかを聞いた。

まず、最も多かった配慮・対応は、「子どもの状況に合わせて応答的な触れ合いや言葉かけ」(25.6%)で、次いで全体として多かったのが「保育者などと共に過ごすことの喜びを味わせる」(9.9%)「応答的なかわりにより生理的欲求を充足させる」(8.2%)、「受容・共感の姿勢により子どもとの信頼関係を築く」(7.6%)だった。いつもは、受け持ち人数が多く、忙しくて、一人ひとり十分な時間をかけられないため、子ども数が少ない時は、こうした受容的対応に配慮するのだろう。



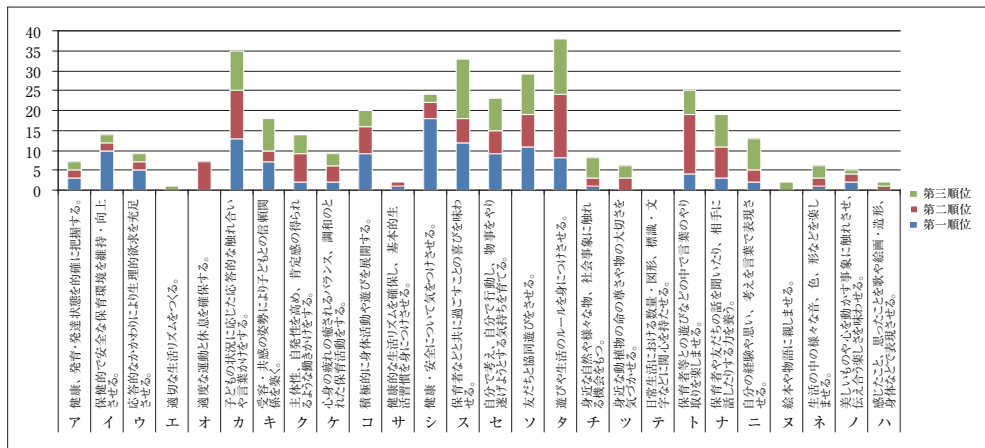
⑥保育室での設定保育……時間的余裕が生じたとき、増やせる配慮・対応

保育室での設定保育の際で、時間的余裕が生じたときに増やせる配慮・対応について聞いた。各保育士はそれぞれ子どもへの思いや自己評価が異なるためか、回答は分散していた。その中で、まず、増やせる配慮事項で最も多かったのは、「主体性、自発性を高め、肯定感の得られるような働きかけ」(12.1%)で、次いで多かったのは、「子どもの状況に合った応答的な触れ合いや言葉かけ」(8.6%)だった。このことは、いつも忙しいため、じっくり時間をかけて、子どもの自発的な動きを待ったり、気持ちを聞くことができないことを示していると言える。



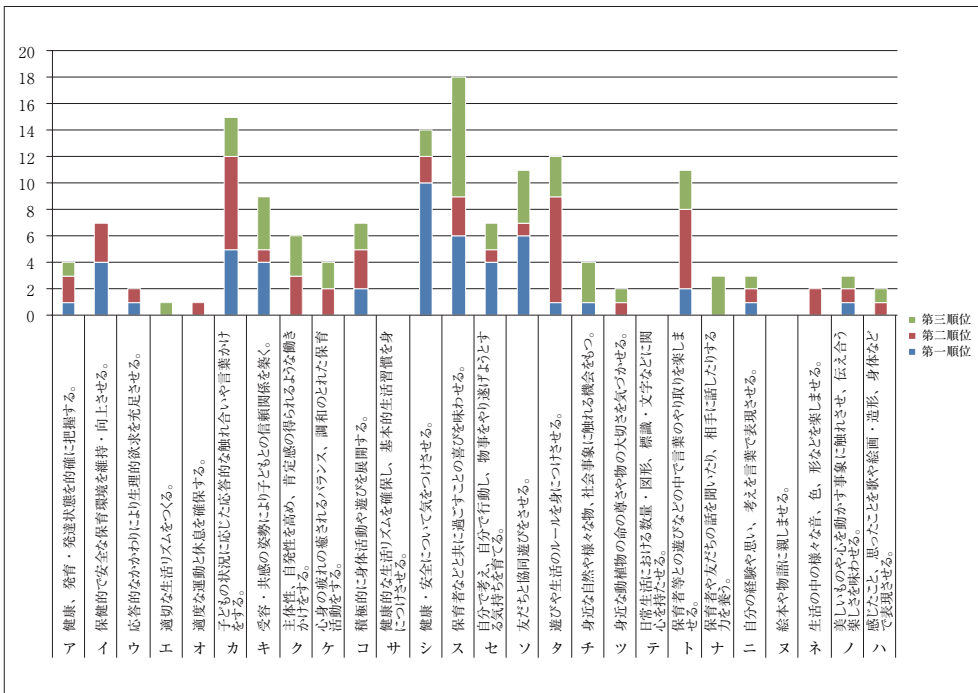
⑦自由遊びのときの配慮・対応

自由遊びでは、まず、最も多かった配慮事項は、子どもの「健康、安全について気をつけさせる」(14.6%)で、次に多かったのは「子どもの状況に合わせた応答的な触れ合いや言葉かけ」(10.6%)だった。その上で、「遊びや生活のルールを身につけさせる」(10.3%)、「保育者などと共に過ごすことの喜びを味わわせる」(8.9%)が挙げられていた。

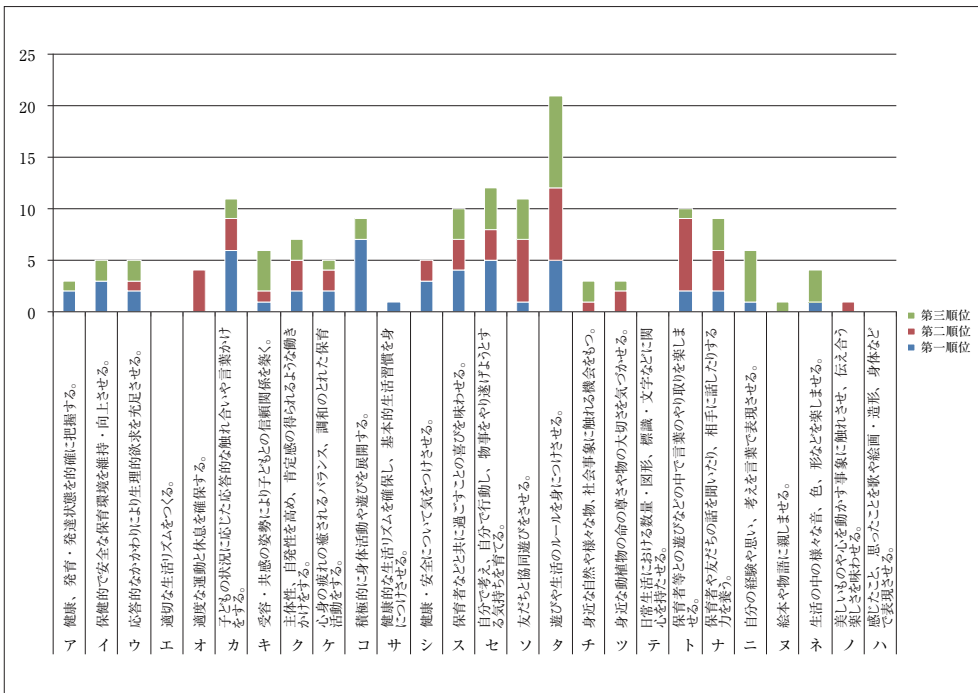


これを保育士経験年数5年以上と2年以下に分けて比較すると、5年以上の保育士は、まず「子どもの状況に応じた応答的な触れ合いや言葉かけ」(12.0%)を最も重視したのち、全体として多くは「遊びや生活のルールを身につけさせる」(13.8%)ことに気を配っていたのに対して、3年以下の保育士は、まず「健康・安全について気をつけさせる」(20.4%)を最も重視したのち、「保育者などと共に過ごすことの喜びを味わせる」(12.2%)、「子どもの状況に応じた応答的な触れ合いや言葉かけ」(10.1%)に配慮していた。2年以下の保育士は、5年以上の保育士ほど「遊びや生活のルールを身につけさせる」は挙げなかった。保育実践を何年か重ねていくと、子どもの健康・安全はすばやく掌握でき、次いで、子どもとのやりとりから子どもの思いが察知でき、こういう機会にゲームの楽しみ方を教え、主体的に取り組む気持ちを育てることができるのであろうか。

(保育士経験 2 年以下)



(保育士経験 5 年以上)



4. まとめ

(1) 保育士の受け持ち人数

保育所における保育士の配置基準は、「児童福祉施設最低基準」に定められているところである。

まず、今回、回答をいただいた園では、「児童福祉施設最低基準」を上回る保育士が配置されていたこともあるが、保育士の配置人員については、多くの保育場面で、8割から9割の回答者が現在の配置状況を「適当」と答えていた。

たとえば、3歳児についてみると、この年齢の保育士配置人員は、最低基準では、子ども6人に対して保育士1名だったものが、急に20人に対して保育士1名となる。実際の受け持ち人員は、4人から22人まで大きなばらつきがあり、15人～19人が44.0%、10人～14人が16.0%、20人～24人が16.0%という状況だった。すなわち、15人～19人が一般的という実態だった。また、保育できるとする人数は15人～19人が33.3%、10人～14人が28.7%、20人～24人が23.1%で、保育できるとする人数は20人未満が74.0%を占めていた。4歳児、5歳児についても同様にばらつきが大きいが、最低基準の20人、30人という数値が一つの目安となっているように考えられる。すなわち、最低基準が示す配置人員が、「所与のもの」として、受け持ち人数の多寡を決める基準となっているといえることができる。

次に、各保育活動ごとに見ると、設定保育のような意図的、計画的な保育活動や食事・排泄・手洗いのようにきめ細かな個別対応の必要な保育活動では、「適当」とする回答が7割程度に減少していた。このことは、一日の流れの中で、保育活動には平板、一様でなく、各活動にかかわりの濃淡があることを示していると言える。

一方、公立園と民間園を対比すると、公立園の保育士配置は民間園より若干厚いという実態にあったが、配置人員に対する受け止め方は、民間園の方が肯定的だった。すなわち、民間園は、配置人員に関する現状を否定的に捉えず、子どもをより多く見ることに肯定的な傾向があることがわかった。また、経験年数別に見ると、ベテランの保育士は、子どもの健康・安全を第一に考えるのか、あるいは経験、体力・行動力についての自意識によるのか明確にはできないが、子どもをより多く保育することに否定的な傾向が見られた。

このように、保育活動には子どもの年齢・発達段階、保育士の実践経験、能力、意識、あるいは園経営の考え方、クラス運営・保育内容の工夫など様々な要素が関係し合うので、適当な受け持ち人数について、誰もが認める妥当だとする数値を見出すことは困難であった。さらに、受け持ちの子ども数が急に1人、2人増えても通常の保育の流れの中に吸収できる、あるいは、子どもが少しぐらい多くても、子ども数に合わせた保育で対応できる、すなわち、子どもが多ければ多いように、少なければ少ないように柔軟に対応できるという保育の特質も数値化を困難にしていると考えられる。

(2) 保育活動における配慮・対応の意識

保育所における保育活動は、日中生活の大半を占める子どもに対して、保護者に代わって行われることから、すべての子どもに対して公平に、かつそれぞれの子どもの欲求、思いに沿って行われなければならない。

「保育所保育指針」が示す考え方、配慮・対応事項は、日々の保育活動に生かされ、月案、週案、日案あるいは連絡帳などに言葉となって書き表わされている。平成 21 年の改定により、その位置づけが「ガイドライン」・「参考」から拘束性を有する基準に変わったが、その規範性が強調されるまでもなく、今回の調査で「保育所保育指針」の理念は保育実践の場に十分浸透しているという感を強くした。

まず、現在の受け持ち人数は適当な人数であるか、否か、その理由はどうかの質問には、総じて、子どもの安全、情緒面を最も重視して、保育できる適当な人数を挙げていた。とりわけ、子どもの年齢が低くなるほど、その傾向が強かった。

すなわち、3歳未満児についてみると、受け持つことのできる人数は、子どもの安全を第一とした上で、全体の動きが「一目で掌握できる」人数を優先的事項としていた。

3歳以上児の場合は、全体を掌握する方法として、「保育者の言葉かけで子どもが顔を向ける」人数を理由に挙げ、4歳児、5歳児になると、その他に「子ども同士でまとまることのできる」人数も理由として挙げていた。

次に、子どもにアクシデントや相当の増減が生じたときの配慮・対応を、保育所保育指針の示す事項に関連付けて聞くと、保育士は、総じて安全・健康など「養護」面の確保を必須の活動とした上で、応答的なかかわり、受容・共感の気持ちを表すことことを最も重視していた。この受容、共感の姿勢は、保育士が最も価値を置いている心の持ち方と言うことができる。

今回のアンケート調査では、各保育士は日々の保育活動を思い浮かべながら、子どもへの一対一の関係を中心に回答していただいたと思われる。この調査により、保育所保育の本質、真髄ともいえるべき、保育の「臨機応変性」、すなわち「柔軟性」と「包容性」が浮き彫りにされたということができる。ただ、子どもを保育する場合、保育士と子どもの一対一の関係の他、子どものもつ集団の力の利用、保育士同士の協働やチームワークといった視点も必要であるという課題も得た。

今後、保育士の業務が複雑、増大するとともに 1 クラスの子ども数の増加、突発的事態の発生、集団行動の取りにくい子の増加などへの対応が今以上に大きな課題となると考えられる。そのとき、この調査結果が、保育士が一対一でなければなし得ないこと、子どものもつ集団の力を使ってなし得ること、保育士のチームワークをどう組み込むかといった視点も加えて、保育活動の重点化、構造化に資することができれば幸いと考える。

「受け持ち人数」に関するアンケート調査についてのお願い

平成 21 年 月 日

名古屋芸術大学人間発達学部

鈴木 岩雄

時下、ますますご活躍のことと存じます。

さて、私は、本年度、本学の研究助成を受けて、下記の研究調査をしております。

つきましては、別紙のアンケート調査を実施させていただきたいと考えておりますので、ご多忙の折誠に恐縮ですが、研究主旨をご理解の上、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

記

1 研究主旨

本研究は、保育所（認定こども園の保育所的機能を含めます。以下同じです。）における受け持ち人数の実態を明らかにし、受け持ち子ども数の増減が保育活動や保育内容にどのような影響を及ぼすかを考察しようとするものです。

2 アンケートの目的

上記主旨に沿って、保育所で、クラス（組、グループ等）を担当している保育士が現在受け持っている子ども数と保育活動ごとの受け持ち可能な子ども数を調査し、子ども数の増減によって対応の仕方、保育活動・内容の重点の置き方がどう変わるかを知るための資料とします。

3 アンケートをお願いする方

保育所で、クラス（組、グループ等）を担当している保育士（正職員、臨時職員の別は問いません。）の方をお願いします。

4 回収と集計

記入いただいたアンケート用紙は、回収用小封筒に封入した上、11月27日（金）までに所属園に置いてある回収用大型封筒に入れていただくようお願いします。

各園において、総括表を同封の上、当方に郵送していただきますようお願いいたします。

内容はコンピュータにより統計処理します。

園名、個人名などは、個別には公表はいたしません。

ご協力いただいた方にご迷惑をかけないよう万全の注意を払います。

「受け持ち人数」に関するアンケート調査

○現在、クラス、組、グループ(以下、「クラス」といいます。障害児保育、一時保育、延長保育のクラスは除きます。)を受け持っている保育士の方にお尋ねします。

◎アンケートにお答えいただく方のことについてお伺いします。

(0)あなたの園の名称と担当クラス名をお伺いします。

①園名 _____ ②担当クラス名 _____

(1)あなたの保育士としての勤務年数(通算年数)をお伺いします。

- ①0～1年未満 ②1～2年未満 ③2～3年未満 ④3～5年未満 ⑤5～10年未満
⑥10～20年未満 ⑦20年以上

(2)あなたの現在の雇用形態をお伺いします。

- ①正規 ②臨時・パート ③その他()

(3)あなたは、現在どのような年齢児を受け持っていますか。(年齢混合の場合は複数回答してください。)

- ①0歳児 ②1歳児 ③2歳児 ④3歳児 ⑤4歳児 ⑥5歳児 ⑦その他()

(4)あなたは、現在のクラスを担当して何年何か月になりますか。

○現在 _____ 年 _____ か月

(5)あなたのクラスは、何人の保育士が担当していますか。なお、単なる補助者の場合は、人数に入れないでください。

○保育士 _____ 人が担当している。

(6)あなたのクラスでの役割をお伺いします。

- ①主担任 ②副担任 ③担当者の一人 ④その他()

◎あなたの受け持ち人数に関してお伺いします。

(7)あなたは、何人の子どもを受け持っていますか。なお、副担任制や数名での担当制の場合は、責任を持って保育、記録することになっている子ども数を書いてください。

○現在、 _____ 人を受け持っている。

(8)あなたが現在受け持っている人数は、次の保育活動を行う場合、どのように感じますか。

- ①登園時の子ども対応……………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
②登園時の保護者対応……………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
③健康・衛生の点検……………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
④自由遊び……………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
⑤保育室での設定保育……………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい

- ⑥園庭での設定保育………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
- ⑦着脱の援助………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
- ⑧手洗いの援助………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
- ⑨食事の援助………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
- ⑩おやつへの援助………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
- ⑪排泄の援助………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
- ⑫昼寝の援助………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
- ⑬降園時の子ども対応………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
- ⑭降園時の保護者対応………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
- ⑮連絡帳等への記録………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい
- ⑯子どもの様子の引継ぎ………a 多すぎる b 適当 c もう少し多くてもよい

(9)あなたのクラスでは、保育室での設定保育は、1日に何回、どのくらいの時間行いますか。

(A)1日の回数

- ①午前1回のみ ②午後1回のみ ③午前1回、午後1回 ④午前1回、午後2回
- ⑤午前2回、午後1回 ⑥午前2回、午後2回 ⑦その他(午前 回、午後 回)
- ⑧設定保育はしない。

(B)1回あたりの時間

- ①約10分 ②約15分 ③約20分 ④約25分 ⑤約30分 ⑥約35分 ⑦約40分 ⑧約45分
- ⑨約50分 ⑩約60分 ⑪約80分 ⑫約90分 ⑬その他(約 分) ⑭設定保育はしない。

(10)新しい顔ぶれの子どものを保育室で設定保育する場合、各年齢児については、あなたは1人で何人ぐらいの子どもを保育できますか、あるいはできると思いますか。人数で教えてください。また、その主な理由を **A表** から選んでご記入ください。(複数回答可)

- ①0歳児ならば____人程度。その主な理由→_____
- ②1歳児ならば____人程度。その主な理由→_____
- ③2歳児ならば____人程度。その主な理由→_____
- ④1、2歳児の混合ならば____人程度。その主な理由→_____
- ⑤3歳児ならば____人程度。その主な理由→_____
- ⑥4歳児ならば____人程度。その主な理由→_____
- ⑦5歳児ならば____人程度。その主な理由→_____
- ⑧3、4歳児の混合ならば____人程度。その主な理由→_____
- ⑨4、5歳児の混合ならば____人程度。その主な理由→_____

A表

- a 子どもの名前と顔(動き)とが概ね結びつく人数だから。
- b 一目で全体の動きが概ね掌握できる人数だから。
- c 保育者の言葉かけで子どもが顔を向ける人数だから
- d 一時的に保育室から離れる際に、子どもに言い聞かせられる人数だから。
- e 経験的に自分が責任を持って保育できる人数だから。

- f 子どもの安全、安心感に気配りできる人数だから。
- g 子ども同士でまとまることのできる人数だから。
- h 保育士配置の最低基準で決まっている人数だから。
- i 園の事情で定められている人数だから。
- j その他 ()

(11)子どもの顔と名前がつながり、子どもも集団生活に慣れてきた段階では、保育室で設定保育を行う場合、各年齢児については、あなたはあと何人程度の子どもまで保育できますか、あるいはできると思いますか。(今の人数が限界の場合は、0人としてください。)

また、どのような理由で、それが可能となりますか。その主な理由を **B表** から選んでご記入ください。(複数回答可)

- ① 0歳児ならば、あと _____ 人程度増やせる。その主な理由→ _____
- ② 1歳児ならば、あと _____ 人程度増やせる。その主な理由→ _____
- ③ 2歳児ならば、あと _____ 人程度増やせる。その主な理由→ _____
- ④ 1、2歳児の混合ならば、あと _____ 人程度増やせる。その主な理由→ _____
- ⑤ 3歳児ならば、あと _____ 人程度増やせる。その主な理由→ _____
- ⑥ 4歳児ならば、あと _____ 人程度増やせる。その主な理由→ _____
- ⑦ 5歳児ならば、あと _____ 人程度増やせる。その主な理由→ _____
- ⑧ 3、4歳児の混合ならば _____ 人程度増やせる。その主な理由→ _____
- ⑨ 4、5歳児の混合ならば _____ 人程度増やせる。その主な理由→ _____

B表

- a 子どもにかかわる頻度や質を変えればできるから。
- b 設定保育の内容を工夫することのできるから。
- c 形成されている子ども集団に吸収できる人数だから。
- d 現在の子どもの活動が安定しているから。
- e 現在の受持ち人数が少ないから。
- f 多い方が効果的な設定保育ができるから。
- g 現在の人数が保育できる最大数だから。
- h この程度の人数ならば何とか保育できそうだから。
- i その他 ()

◎あなたの保育活動についてお伺いします。

(12)あなたの受け持っているクラスに、年度途中で新たに1人の子どもが入園してきたとき、保育活動全般について、その子には特にどのような事項に配慮をしていきますか。

別紙C表 から度合の高い事項を3つ選んで、次に記入してください。

○第1順位 _____ 第2順位 _____ 第3順位 _____

(13)保育室で設定保育をする場合で、あなたのクラスの子どもの数が多すぎると感じるときは、特にどのよう

な事項に配慮や対応が不十分になりますか。

別紙C表 から度合の高い事項を3つ選んで、次に記入してください。

○第1順位_____ 第2順位_____ 第3順位_____

(14)保育室で設定保育をしている場合で、あなたのクラスの子ども1人について、1対1の対応をしなければならない事態（部屋からの飛び出し、お漏らしなど）が発生したときは、どのような対応をすることになっていますか。

- ① 1対1の対応が必要な子については、補助者が対応する。
- ② 1対1の対応が必要な子については、副担任や主任等が対応する。
- ③ 1対1の対応が必要な子については、担任が対応し、他の子どもについては補助者や副担任等が対応する。
- ④ 1対1の対応が必要な子については、担任が対応し、他の子どもについては課題を与えたり、よく言い聞かせておく。
- ⑤ その他（ _____ ）

(15)この場合、クラスの他の子どもたちに対しては、特にどのような事項に配慮をしていきますか。

別紙C表から度合の高い事項を3つ選んで、次に記入してください。

○第1順位_____ 第2順位_____ 第3順位_____

(16)保育室で設定保育する場合、あなたのクラスの子ども数が欠席、退所等の理由で相当数減少したときは、特にどのような事項に配慮ができるようになりますか。

別紙C表から度合の高い事項を3つ選んで、次に記入してください。

○第1順位_____ 第2順位_____ 第3順位_____

(17)保育室で設定保育する場合、時間的にもっと余裕があったら、特にどのような事項に配慮ができるようになりますか。

別紙C表から度合の高い事項を3つ選んで、次に記入してください。

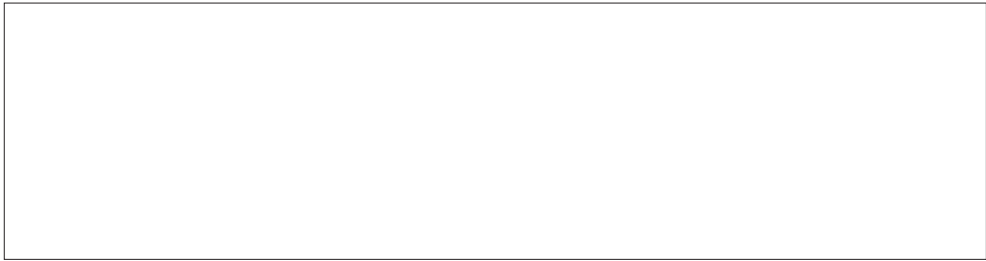
○第1順位_____ 第2順位_____ 第3順位_____

(18)設定保育ではない、自由遊びのときは、あなたはクラスの子どもについて、特にどのような事項に配慮しますか。

別紙C表から度合の高い事項を3つ選んで、次に記入してください。

○第1順位_____ 第2順位_____ 第3順位_____

(19)保育士配置の最低基準や保育所保育指針の保育内容部分に関して、日ごろ感じていることや問題点などがありましたらお書きください。



ご協力ありがとうございました。

別紙 C 表 (保育内容のポイント)

- ア 健康、発育・発達状態を的確に把握する。
- イ 保健的で安全な保育環境を維持・向上させる。
- ウ 応答的なかかわりにより生理的欲求を充足させる。
- エ 適切な生活リズムをつくる。
- オ 適度な運動と休息を確保する。

- カ 子どもの状況に応じた応答的な触れ合いや言葉かけをする。
- キ 受容・共感の姿勢により子どもとの信頼関係を築く。
- ク 主体性、自発性を高め、肯定感の得られるような働きかけをする。
- ケ 心身の疲れの癒されるバランス、調和のとれた保育活動をする。

- コ 積極的に身体活動や遊びを展開する。
- サ 健康的な生活リズムを確保し、基本的な生活習慣を身につけさせる。
- シ 健康・安全について気をつけさせる。

- ス 保育者などと共に過ごすことの喜びを味わせる。
- セ 自分で考え、自分で行動し、物事をやり遂げようとする気持ちを育てる。
- ソ 友だちと協同遊びをさせる。
- タ 遊びや生活のルールを身につけさせる。

- チ 身近な自然や様々な物、社会事象に触れる機会をもつ。
- ツ 身近な動植物の命の尊さや物の大切さを気づかせる。
- テ 日常生活における数量・図形、標識・文字などに関心を持たせる。

- ト 保育者等との遊びなどの中で言葉のやり取りを楽しませる。
- ナ 保育者や友だちの話を聞いたり、相手に話したりする力を養う。
- ニ 自分の経験や思い、考えを言葉で表現させる。
- ヌ 絵本や物語に親しませる。

- ネ 生活の中の様々な音、色、形などを楽しませる。
- ノ 美しいものや心を動かす事象に触れさせ、伝え合う楽しさを味わせる。
- ハ 感じたこと、思ったことを歌や絵画・造形、身体などで表現させる。

総括表

取りまとめをしてくださる先生をお願いします。

◎あなたの保育所（こども園の保育所機能を含みます。）のことについてお尋ねします。

- 1 保育所の所在地（ ）市町村
- 2 保育所の設置形態 ①公立公営、②公立民営、③私立民営、④その他（ ）
- 3 保育所の名称 _____
- 4 子どもの定員と在籍児数ご記入ください。

○定員及び在籍児数は記入月現在でお願いします。

年齢児	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
定員	人	人	人	人	人	人
在籍児数	人	人	人	人	人	人

- 5 組（クラス、グループ等）名を記入の上、歳児別の構成、在籍児数と担当保育士（担任）数をご記入ください。

○保育士は、正規・非正規を問いませ。単なる補助者は人数に入れないでください。

○年齢構成欄には、歳児別に「0」、「0・1・2」、「3」、「3・4・5」のようにご記入ください。

○在籍児数は、記入月現在でお願いします。

組名	組	組	組	組
年齢構成				
在籍児数	人	人	人	人
担当保育士数	人	人	人	人

組名	組	組	組	組
年齢構成				
在籍児数	人	人	人	人
担当保育士数	人	人	人	人

組名	組	組	組	組
年齢構成				
在籍児数	人	人	人	人
担当保育士数	人	人	人	人

- 6 平成21年 月 日記入。